

## 選 評

### 不器用な凄み

青山七恵

「追いかける瞳」には、終始奇妙な緊張感がみなぎっている。ひとり薄暗く目玉に魅入られているこの主人公の行く末が気になり、最後まで惹きつけられた。文章がでこぼこしているところもあるけれど、このいびつさ、不安定さが目玉のイメージとうまくコンビを組んで小説の力になり、ぐいぐいと読ませる。不器用ながらも、凄みのようなものがあつた。それは、目玉に魅せられた主人公と同じくらい、著者の山田さんが執念を持ってこの作品を見つめ続けたからではないかと思う。

「畜ケルベロス談」は、甲府を舞台にした太宰治の「畜犬談」を下敷きにした作品。軽妙でこなれた書きぶりで、独特のユーモアが光っているし、最後には冥界の番犬ケルベロスの哀愁まで漂わせている。話の運びがとても巧みだと思った。土台の「畜犬談」にやや拗りすぎている気もしたけれど、それを差し引きしても、安定した筆力を感じる。

「行路」は、タコのタエコさんの手紙の素朴な文面が良かった。音叉という小道具も上手に使っていて、挫折した青年の人生の転換点をさりげなく描き、最後の一行のあとの余白に温かいものが残る。

「悪意の居留守」は高校生活の汲々、ひえびえとした空気をうまくとらえている。体育祭で発表する踊りの練習のくだりが特に印象的だった。羞恥心を押して踊るのは苦痛だけれど一人だけ踊れないのはもっと恐ろしい。そう思いながら必死に踊り続ける主人公の姿に、心打たれた。